

Title	half-norm空間における正作用素のスペクトル(Positivityに関連する解析学)
Author(s)	澤島, 侑子; 竹尾, 富貴子
Citation	数理解析研究所講究録 (1985), 544: 47-69
Issue Date	1985-01
URL	http://hdl.handle.net/2433/98800
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

half-norm 空間における正作用素のスペクトル

お茶の水女大 理 澤島侑子 (Ikuko Sawashima)

お茶の水女大 理 竹尾富貴子 (Fukiko Takeo)

§ 1. 序

順序線形空間上の正斉次、加法法的汎関数を, W. Arendt, P. R. Chernoff and T. Kato は 半ノルム と呼び, これを用いて 消散性 の概念をバナッハ空間に拡張して, 消散的作用素に関する従来の結果を拡張した[1]。その後, S. Yamamuro, D. W. Robinson らは, 順序バナッハ空間の性質を半ノルムを用いて, 種々研究している[4, 6]。正斉次加法法的汎関数は, 以前から, M. Krein, S. Grossberg らにより 順序に関係ある解析には, しばしば用いられていた[3]。順序バナッハ空間の構造はノルムよりむしろ半ノルムによりよく反映される場合もある。順序バナッハ空間上の正作用素のスペクトル理論でも, ノルムの性質より半ノルムが有効に働いているように思われる。

ここでは, 正錐上に半ノルムを定義し, 半ノルムにより, 閉集合, 完備性(ノルム完備より弱い)を定義する。

更に，正斉次加法的作用素に対し，半ノルムからスペクトル
 及び，スペクトル半径を定義し，スペクトル半径の表わ
 スペクトルに入るなど，スペクトルの性質を半ノルムを使っ
 て調べる。

§2. 半ノルム空間とノルム空間について

E を実ベクトル空間， p は E 上の関数で次の PI) ~ PIV) をみたすとき， E 上の半ノルム (half-norm) という [1].

$$\text{PI)} \quad p(x) \geq 0 \quad (\forall x \in E)$$

$$\text{PII)} \quad p(x+y) \leq p(x) + p(y) \quad (\forall x, y \in E)$$

$$\text{PIII)} \quad p(\alpha x) = \alpha p(x) \quad (\forall \alpha \geq 0, \forall x \in E)$$

$$\text{PIV)} \quad p(x) \vee p(-x) = 0 \Leftrightarrow x = 0$$

$E_+ = \{x \in E; p(-x) = 0\}$ を正錐とよび，これによつて E 上に
 順序を入れることができる。 $E = E_+ - E_+$ のとき， (E, p) を
半ノルム (half-norm) 空間 という。半ノルムから E 上にノル
 ムを導入する仕方はいろいろある [6]。一例をあげると，任意
 の $x \in E$ に対し $\|x\|_p = p(x) \vee p(-x)$ とおくと， $\|\cdot\|_p$ は E 上の
 ノルムになる。

次に，ノルム空間 E から半ノルムの作り方を述べる。
 E が順序ノルム空間の場合を考える。正錐 E_+ が正規，即ち
 ある正数 γ が存在して，任意の $x, y \in E_+$ に対し $\|x+y\| \geq \gamma \|x\|$

が成り立ち、かつ、 $E = E_+ - E_+$ と仮定する。このとき、 E 上に半ノルムを定義する仕方はいろいろある。その一つとして

$$p(x) = \inf \{ \|x+y\|; y \in E_+ \} \quad (\forall x \in E)$$

によって定義することが出来る[4]。これと標準半ノルムとよぶ。 E 上のノルムが単調、即ち、 $0 \leq x \leq y$ ならば $\|x\| \leq \|y\|$ のとき、上述の半ノルム $p(x)$ は $x \in E_+$ ならば $p(x) = \|x\|$ となる。又、順序ノルム空間に別のノルム $\|\cdot\|_g$ 、及び、前述のように定義した E 上の半ノルム p かつ、新たに $\|\cdot\|_p$ を次のように導入することが出来る。任意の $x \in E$ に対し、

$$\|x\|_p = p(x) \vee p(-x)$$

$$\|x\|_g = \inf \{ \lambda > 0; x \in \lambda B \}$$

ただし、 $B = \{ \alpha x - \beta y; 0 \leq \alpha, \beta, \alpha + \beta = 1, x, y \in E_+, \|x\| \leq 1, \|y\| \leq 1 \}$ とする。このとき、次の命題を得る。

命題 1. 順序ノルム空間 $(E, \|\cdot\|)$ に対し、上述のように $\|\cdot\|_p, \|\cdot\|_g$ を定義すると、任意の $x \in E$ に対し、

$$\|x\|_g \geq \|x\| \geq \|x\|_p$$

が成り立つ。

順序ノルム空間については、正錐 E_+ の上の性質が、 E 全体にかなり深く反映している。以後、 E_+ の上に話の重実

を おいて 考える.

§ 3. 半ノルム錐について

E_+ を順序線形空間 E の 正錐, 即ち,

$$a) \quad E_+ \ni x, y \Rightarrow x+y \in E_+$$

$$b) \quad E_+ \ni x, \alpha \geq 0 \Rightarrow \alpha x \in E_+$$

$$c) \quad E_+ \cap (-E_+) = \{0\}$$

とする. p は E_+ 上の関数で, 次の PI') ~ PIV') をみたすとき,
 E_+ 上の半ノルムといい, (E_+, p) を 半ノルム錐 という.

$$PI') \quad p(x) \geq 0 \quad (\forall x \in E_+)$$

$$PII') \quad p(x) \leq p(x+y) \leq p(x)+p(y) \quad (\forall x, y \in E_+)$$

$$PIII') \quad p(\alpha x) = \alpha p(x) \quad (\forall \alpha \geq 0, \forall x \in E_+)$$

$$PIV') \quad p(x) = 0 \Leftrightarrow x = 0$$

$E := E_+ - E_+$ とおき, E の中で E_+ が閉集合であることと, 次のように定める. E の任意の元 x に対して, もし任意の正数 ε に対し, 適当な E_+ の元 y が存在して, $y+x \in E_+$ かつ $p(y) \leq \varepsilon$ をみたすならば, $x \in E_+$ が成立するとき, E_+ は p -閉 であるという.

E_+ 上の半ノルムは, E 上へ次のように拡張できる.

任意の $x \in E$ に対し,

$$\hat{p}(x) = \inf \{ p(a); a \in E_+, a \geq x \}$$

とおく。このとき、次の命題が成り立つ。

命題 2. E_+ が p -閉ならば、次が成り立つ。

- i) $\{x \in E; \tilde{p}(-x) = 0\} = E_+$
- ii) $x \in E$ に対し, $\tilde{p}(x) \vee \tilde{p}(-x) = 0 \Leftrightarrow x = 0$
- iii) (E, \tilde{p}) は 半ノルム空間である。

次に, E_+ に完備性を定義する。 E_+ の中の任意の点列 $\{x_n\}$ に対し, $\sum_{n=1}^{\infty} p(x_n) < \infty$ ならば, 適当な $x \in E_+$ が存在して, $x \geq \sum_{n=1}^k x_n$ ($\forall k \in \mathbb{N}$) かつ $p(x - \sum_{n=1}^k x_n) \rightarrow 0$ ($k \rightarrow \infty$) を満たすとき, (E_+, p) を 単調増加完備 (positively monotone complete) という。

実線形空間 E 上に, §2 で述べたような半ノルム p が既に定義されていた場合, 半ノルム空間 (E, p) と, ここで定義した半ノルム錐 (E_+, p) との関係を調べる。 $E_+ = \{x \in E; p(-x) = 0\}$ とおき, p を E_+ 上に制限すると, 次の命題を得る。

命題 3. (E_+, p) は p -閉な半ノルム錐である。

命題 4. E の元 x に対し

$$p(x) = \inf \{ p(a) ; a \in E_+, a \geq x \}$$

とおくと, $p(x) \geq p(a)$ である.

又, E が順序ノルム空間である場合, これらの考えは, どのような対応がつくかについて, 次の命題を示す.

命題 5. E は順序ノルム空間, E_+ は正定規な系正錐で, $E = E_+ - E_+$ とする. 任意の $x \in E_+$ に対し, $p(x) = \inf \{ \|x+y\| ; y \in E_+ \}$ とおくと, (E_+, p) は半ノルム空間である.

このとき, E_+ がノルム完備ならば, (E_+, p) は p -閉かつ単調増加完備である.

(証明) E_+ は正定規より $\forall \lambda > 0$ が存在して, 任意の E_+ の元 x, y に対し, $\|x+y\| \geq \lambda \|x\|$ が成り立つので, $p(x) \geq \lambda \|x\|$ となる. これより, E_+ はノルム完備だから, E_+ は p -閉となる.

又, $\{x_n\}$ を E_+ の中の点列で $\sum_{n=1}^{\infty} p(x_n) < \infty$ とする. E_+ が正定規より, $\{\sum_{n=1}^k x_n\}_k$ は E_+ の中のノルムコーシー列となり, E_+ がノルム完備より $x \in E_+$ が存在して, $x \geq \sum_{n=1}^k x_n$ ($\forall k \in \mathbb{N}$) かつ $p(x - \sum_{n=1}^k x_n) \leq \|x - \sum_{n=1}^k x_n\| \rightarrow 0$ ($k \rightarrow \infty$) となるので, (E_+, p) は単調増加完備である. //

注意 命題5の逆は必ずしも成り立たない。即ち (E_+, p) が p -内かつ単調増加完備であっても、ノルム完備とはならない例が次に示すように存在する。

例1. E を $C[-1, 1]$ の次のような部分空間とする。

$$E = \left\{ f(x) = \sum_{n=0}^{\infty} a_n x^n \in C[-1, 1] ; \sum_{n=0}^{\infty} f^{(n)}(0) \text{ は絶対収束し、その和は } 0 \right\}.$$

E の元 f に対し、 $\|f\| = \sup_{n \geq 0} |f^{(n)}(0)|$ として E にノルムを

入れる。 $E_+ = \{ f \in E ; a_n \geq 0 \ (\forall n \geq 1) \}$ とおく。

このとき、 E は順序ノルム空間で、 E_+ は正規な純正錐で、 $E = E_+ - E_+$ である。又 E_+ はノルム完備ではない。

何故なら、 $f_j(x) = -1 + \sum_{n=1}^{2^j} \frac{1}{n! 2^j} x^n$ とおくと $f_j \in E_+$

で $\{f_j\}$ はコーシー列だから、 $f_j \rightarrow -1 \ (j \rightarrow \infty)$ で

$\lim_{j \rightarrow \infty} f_j \notin E$ である。

$$p(f) = \inf \{ \|f + g\| ; g \in E_+ \}$$

とおくと、 E_+ は p -内かつ単調増加完備である。

命題5の逆に対する命題を次に述べる。

命題6. (E_+, p) は p -内、単調増加完備な半ノルム錐とする。 $E = E_+ - E_+$ とおき、 E_+ の任意の元 x に対し

では, $p(x) = \|x\|$ となるように E 上に $\|\cdot\|$ を定義する. このとき, 正数 c が存在して, 任意の E の元 x に対しある E_+ の元 a が存在して, $a \geq x$ かつ $p(a) \leq c\|x\|$ となるならば, E_+ は $\|\cdot\|$ 完備 となり, $(E, \|\cdot\|)$ は バナッハ空間 となる.

(証明) $\{x_n\}$ を E の中の $\|\cdot\|$ \mathcal{C} -列 とする. このとき, 適当な部分列をとって, $\|x_{n_j} - x_{n_{j+1}}\| < \frac{1}{2^j}$ とできる. 仮定から, $a_j, b_j \in E_+$ が存在して

$$x_{n_j} - x_{n_{j+1}} = a_j - b_j, \quad p(a_j) \leq c\|x_{n_j} - x_{n_{j+1}}\| < \frac{c}{2^j}$$

となる. これより, $\sum_{j=1}^{\infty} p(a_j) \leq c \sum_{j=1}^{\infty} \frac{1}{2^j} = c$ となり, E_+ は 単調増加完備 より, $a \geq \sum_{j=1}^k a_j$ ($\forall k \in \mathbb{N}$) かつ $p(a - \sum_{j=1}^k a_j) \rightarrow 0$ ($k \rightarrow \infty$) なる $a \in E_+$ が存在する. 又,

$$\sum_{j=1}^{\infty} p(b_j) \leq \sum_{j=1}^{\infty} (\|a_j\| + \|x_{n_j} - x_{n_{j+1}}\|) \leq \sum_{j=1}^{\infty} (c+1) \frac{1}{2^j} = c+1$$

より, $b \geq \sum_{j=1}^k b_j$ ($\forall k \in \mathbb{N}$), $p(b - \sum_{j=1}^k b_j) \rightarrow 0$ ($k \rightarrow \infty$) なる $b \in E_+$ が存在する. $x_n = x_1 - \sum_{j=1}^{n-1} (a_j - b_j)$ より $x_0 = x_1 - a + b$ が $\{x_n\}$ の極限であり, $x_0 \in E$ である. よって, $(E, \|\cdot\|)$ は バナッハ空間 である.

特に, $\{x_n\} \subset E_+$ ならば, $p(-x_0) = 0$ 故に $x_0 \in E_+$ であることが導かれ, E_+ は $\|\cdot\|$ 完備 である. //

§ 4. E の複素係数化空間 \tilde{E} 上への p の拡張, 及 w ノルム
の導入.

(E_+, p) は p -内, 単調増加完備な半ノルム錐とする.

$E = E_+ - E_+$ の複素係数化空間 $\tilde{E} = E_+ + iE$ 上へ p を次の
ように拡張する. 任意の $z \in \tilde{E}$ に対し,

$$\hat{p}(z) = \inf \{ p(a); a \in E_+, a \geq \operatorname{Re}(e^{-i\theta} z) \} \quad (\forall \theta \in [-\frac{\pi}{2}, \frac{\pi}{2}])$$

とする. $z \in E$ に対しては, ここで定義した \hat{p} と, 命題 2 の
前で定義した \hat{p} と一致する. そしてこの \hat{p} に対し, 次の命題
が成り立つ.

命題 7. i) $\hat{p}(z) \geq 0 \quad (\forall z \in \tilde{E})$

$$\text{ii) } \hat{p}(z+w) \leq \hat{p}(z) + \hat{p}(w) \quad (\forall z, w \in \tilde{E})$$

$$\text{iii) } \alpha \hat{p}(z) = \hat{p}(\alpha z) \quad (\forall \alpha \geq 0, \forall z \in \tilde{E})$$

$$\alpha \in E_+ \Rightarrow \hat{p}(\alpha x) \leq |\alpha| \hat{p}(x) \quad (\forall \alpha \in \mathbb{C})$$

$$\text{iv) } \alpha \in E_+ \Rightarrow \hat{p}(\alpha) = p(\alpha)$$

$$\text{v) } \hat{p}(-z) \vee \hat{p}(z) = 0 \Leftrightarrow z = 0$$

$$\text{vi) } \{z \in \tilde{E}; \hat{p}(-z) = 0\} = E_+$$

(証明) i) ~ iv) は容易に確かめられる.

v). $\hat{p}(-z) \vee \hat{p}(z) = 0$ とする. 任意の $\varepsilon > 0$ に対し, $a, b \in E_+$
が存在して, $a \geq \operatorname{Re}(e^{-i\theta} z)$, $b \geq \operatorname{Re}(e^{-i\theta} (-z)) \quad (\forall \theta \in [-\frac{\pi}{2}, \frac{\pi}{2}])$

かつ $p(a) \leq \varepsilon$, $p(b) \leq \varepsilon$ が成り立つ。 $z = x + iy$ とおくと
 $0 = 0$ に対して上式成立より, $\tilde{p}(x) \leq p(a) \leq \varepsilon$, $\tilde{p}(-x) \leq p(b) \leq \varepsilon$
 $\varepsilon > 0$ は任意より $\tilde{p}(x) = \tilde{p}(-x) = 0$. $\theta = \frac{\pi}{2}$ に対して同様にすると
 $\tilde{p}(y) = \tilde{p}(-y) = 0$. 命題 2 より $x = y = 0$, よって $z = 0$ である.
 vi) も v) と同様にして証明できる. //

\tilde{E} 上へ次のような 2 種類のノルムを導入する. 任意の
 $z \in \tilde{E}$ に対し,

$$\|z\|_1 = \tilde{p}(z) \vee \tilde{p}(-z)$$

$$\|z\|_2 = \inf \{ p(a); a \in E_+, a \geq \operatorname{Re}(e^{-i\theta} z) \ (\forall \theta \in [0, 2\pi)) \}$$

とおく. これらがノルムになることは明らかである. そして
 これらが同値であることも次の命題によりわかる.

命題 8. 任意の $z \in \tilde{E}$ に対し

$$\|z\|_1 \leq \|z\|_2 \leq 2\|z\|_1$$

が成り立つ。

E が順序ノルム空間で, E_+ が正規な純正錐で $E = E_+ - E_+$
 のとき, 半ノルムと命題 5 のようにして作られたものであれば,
 E がこのノルム $\|\cdot\|$ で完備ならば, 上述の $\|\cdot\|_1$, $\|\cdot\|_2$ は
 $\|\cdot\|$ と同値なノルムである (開写像定理より). しかし,

もともとのノルム $\|\cdot\|$ で完備でなくとも, $\|\cdot\|_1, \|\cdot\|_2$ に関して E は次の定理で示すように完備になる。

定理 1. (E_+, p) は p -関, 単調増加完備な半ノルム錐とする。このとき, $E = E_+ - E_+$ は上述の $\|\cdot\|_1$ 及 $\|\cdot\|_2$ に関して完備である。即ち $(E, \|\cdot\|_1)$ 及 $(E, \|\cdot\|_2)$ はバナッハ空間となる。

(証明) 任意の $z \in E$ と任意の $\varepsilon > 0$ に対し, ある $a \in E_+$ が存在して, $a \geq z, -z$ かつ $\|z\|_2 + \varepsilon \geq p(a)$ となる。これより, 命題 6 から $(E, \|\cdot\|_2)$ はバナッハ空間となる。又 命題 8 より $\|\cdot\|_1$ と $\|\cdot\|_2$ は同値だから, $(E, \|\cdot\|_1)$ もバナッハ空間となる。 //

注意 前述の例 1 における E は, 最初のノルムに関して完備でないが, この $\|\cdot\|_1, \|\cdot\|_2$ に関しては完備である。

E 上のノルム $\|\cdot\|_1, \|\cdot\|_2$ と 8.2 で述べた $\|\cdot\|_p, \|\cdot\|_q$ との関係については, 次の命題が成り立つ。

命題 9. E を順序ノルム空間で, E_+ は正規な純正

錐で $E = E_+ - E_+$ とする。このとき、命題5のようにして作
った半ノルム p により定義される $\|\cdot\|_1, \|\cdot\|_2$ と §2 で述べ
た $\|\cdot\|_p, \|\cdot\|_f$ との関係は、任意の $x \in E$ に対し

$$\|x\|_p \leq \|x\|_1 \leq \|x\|_2 \leq \|x\|_f$$

が成り立つ。

§5. E_+ 上の正斉次加法的作用素について。

(E_+, p) は p -肉, 単調増加完備な半ノルム錐とする。

T を E_+ から E_+ の中への正斉次加法的作用素, 即ち

$$T(x+y) = Tx + Ty \quad (\forall x, y \in E_+)$$

$$T(\alpha x) = \alpha Tx \quad (\forall \alpha \geq 0, \forall x \in E_+)$$

をみたすものとする。このとき, T を $\hat{E} (:= (E_+ - E_+) + i(E_+ - E_+))$
上の線形作用素 \hat{T} に一意に拡張できる。

T のスเปクトルを考えるために, \hat{E} 上の線形作用素の
有界性を定義する。 $L(\hat{E})$ を \hat{E} から \hat{E} への線形作用素の集合
とする。 $S \in L(\hat{E})$ に対し

$$\hat{p}(S) = \sup \{ \hat{p}(Sx); x \in E_+, p(x) \leq 1 \}$$

と定義し,

$$\mathcal{L}(\hat{E}) = \{ S \in L(\hat{E}); \hat{p}(S) \vee \hat{p}(-S) < \infty \}$$

とする。このとき, 次の命題が成り立つ。

命題 10. E_+ から E_+ への正斉次加法的作用素

T_1, T_2 に対して、次が成り立つ。

$$(i) \quad p(T_1 x) \leq \tilde{p}(T_1) p(x) \quad (\forall x \in E_+)$$

$$(ii) \quad \tilde{p}(T_1 T_2) \leq \tilde{p}(T_1) \tilde{p}(T_2)$$

又、作用素の順序に関し、次の定理をうる。

定理 2. $S \in L(\tilde{E})$ に対して、次は同値である。

$$i) \quad S E_+ \subset E_+$$

ii) ある $c > 0$ が存在して、任意の $x \in E_+ \cup (-E_+)$ に対して、 $\tilde{p}(Sx) \leq c \tilde{p}(x)$ が成り立つ。

iii) ある $c > 0$ が存在して、任意の $z \in \tilde{E}$ に対して $\tilde{p}(Sz) \leq c \tilde{p}(z)$ が成り立つ。

$$iv) \quad \tilde{E}_+ = E_+ + c E_+ \text{ に対し, } S \tilde{E}_+ \subset \tilde{E}_+$$

(証明) $i) \Rightarrow ii)$: $ii)$ とみんすような $c > 0$ が存在しないとき、 E_+ の数列 $\{x_n\}$ で $\tilde{p}(Sx_n) \geq n^3 \tilde{p}(x_n)$ かつ $\tilde{p}(x_n) = \frac{1}{n^2}$ とみんすものが存在する。 E_+ は単調増加完備より $x \geq \sum_{n=1}^{\infty} x_n$ ($\forall n \in \mathbb{N}$) なる $x \in E_+$ が存在するが $S E_+ \subset E_+$ より $\tilde{p}(Sx) \geq \tilde{p}(Sx_n) \geq n$ ($\forall n \in \mathbb{N}$) となり矛盾である。

$ii) \Rightarrow iii)$: 任意の $z \in \tilde{E}$ と任意の $\varepsilon > 0$ に対し、 $a \in E_+$ が存在し

$a \geq \operatorname{Re}(e^{-i\theta} z)$ ($\forall \theta \in [-\frac{\pi}{2}, \frac{\pi}{2}]$) かつ $p(a) \leq \hat{p}(z) + \varepsilon$ が成り立つ。

ii) より $x \in E_+$ に対して $\hat{p}(-x) = 0$ から $p(-Sx) \leq c p(-x) = 0$ となり,

$Sx \in E_+$ が言えるので $SE_+ \subset E_+$ となる。よって, $a \geq \operatorname{Re}(e^{-i\theta} z)$

より $Sa \geq \operatorname{Re}(e^{-i\theta} Sz)$ となる。従って $\hat{p}(Sz) \leq p(Sa)$

$\leq c p(a) \leq c(\hat{p}(z) + \varepsilon)$, $\varepsilon > 0$ は任意より $\hat{p}(Sz) \leq c \hat{p}(z)$

iii) \Rightarrow iv) : iii) \Rightarrow iii) の証明の中で示したように $x \in (-E_+)$ に対して, $\hat{p}(Sx) \leq c \hat{p}(x)$ から $SE_+ \subset E_+$ となる。これより

$S(E_+ + iE_+) = SE_+ + iSE_+ \subset E_+ + iE_+$ である。

iv) \Rightarrow i) : 任意の $x \in E_+$ に対して $Tx \in \tilde{E}_+$ は明らかより $Tx = u + iv$ とおくと, $u, v \in E_+$ である。又 $ix \in \tilde{E}_+$ より $T(ix) = i(u + iv) = iu - v \in \tilde{E}_+$ となり $u, -v \in E_+$ である。従って $v = 0$ となり $Tx = u \in E_+$ となる。//

定理 2 の i) ~ iv) のいずれかとみたすと, S は E 上の正作用素といい, $S \geq 0$ とかく。

正作用素 T のスペクトルの研究はこれまでいろいろとなされている [4, Appendix]. スペクトル半径を $\lim_{n \rightarrow \infty} \|T^n\|^{1/n}$ と関係づけるのではなく, $\lim_{n \rightarrow \infty} \hat{p}(T^n)^{1/n}$ と関係づける, あるいはスペクトルの性値を E_+ 上だけに限って考察することは, F. F. Bonsall [2] によって既に研究されている。しかし, F. F. Bonsall はスペクトルを正の実軸上だけに限る

ているので、ここではスペクトルを以下に述べるように、複素平面上で考える。又、F. F. Bonsall は E_+ がノルム完備という条件をつけて考察しているが、ここでは命題5に示すように、これより弱い条件のもとで考える。

ここで、 T の ρ によるスペクトルを次のように決める。 $\lambda \in \mathbb{C}$ に対し、 $\lambda - \tilde{T}$ が $\mathcal{L}(\tilde{E})$ の中に逆元をもつとき、 λ はレゾルバント集合 $\rho_R(T)$ に入るといふ。この逆元を $R_R(\lambda, T)$ と書く。 $\rho_R(T)$ の補集合 $(\mathbb{C} \setminus \rho_R(T))$ を T のスペクトル $\sigma_R(T)$ といふ。又、 T のスペクトル半径 $r_R(T)$ を $\lim_{n \rightarrow \infty} \rho(T^n)^{1/n}$ によって定義する。このとき、次の命題が成り立つ。

命題 11. $|\lambda| > r_R(T)$ ならば $\lambda \in \rho_R(T)$ であり、

$R_R(\lambda, T) = \lim_{R \rightarrow \infty} \sum_{n=0}^R \frac{T^n}{\lambda^{n+1}}$ である。(但し、右辺の収束は任意の $x \in E_+$ に対し $\rho(\pm(R_R(\lambda, T)x - \sum_{n=0}^R \frac{T^n}{\lambda^{n+1}} x)) \rightarrow 0$ ($R \rightarrow \infty$) を意味する。)

特に、 $\lambda > r_R(T)$ ならば $R_R(\lambda, T) \geq 0$ である。

証明の準備に次の補題を示す。

補題 E_+ の中の点列 $\{x_n\}$ と複素数列 $\{\alpha_n\}$ に対し $\sum_{n=1}^{\infty} \rho(|\alpha_n| x_n) < \infty$ ならば、ある $z \in \tilde{E}$ が存在して

$$\tilde{p}\left(\pm\left(z - \sum_{n=1}^k \alpha_n x_n\right)\right) \rightarrow 0 \quad (k \rightarrow \infty)$$

が成り立つ。

(補題の証明) E_+ の点列 $\{x_n\}$ と複素数数列 $\{\alpha_n\}$ に対し

$$\sum_{n=1}^{\infty} \tilde{p}(|\alpha_n| x_n) < \infty \text{ とする。このとき、 } \alpha_n = a_n + i b_n \quad (a_n, b_n \in \mathbb{R})$$

とおくと、 $\sum_{n=1}^{\infty} \tilde{p}(|a_n| x_n) < \infty$ か $\sum_{n=1}^{\infty} \tilde{p}(|b_n| x_n) < \infty$ である。

E_+ は単調増加完備より、 E_+ の元 u_1, u_2 が存在して

$$u_1 \geq \sum_{\substack{n=1 \\ a_n \geq 0}}^k a_n x_n, \quad u_2 \geq \sum_{\substack{n=1 \\ a_n < 0}}^k (-a_n) x_n \quad (k \in \mathbb{N}) \quad \text{かつ}$$

$$p(u_1 - \sum_{\substack{n=1 \\ a_n \geq 0}}^k a_n x_n) \rightarrow 0, \quad p(u_2 - \sum_{\substack{n=1 \\ a_n < 0}}^k (-a_n) x_n) \rightarrow 0 \quad (k \rightarrow \infty) \text{ となる}$$

$$\tilde{p}\left(\pm\left((u_1 - u_2) - \sum_{n=1}^k a_n x_n\right)\right) \rightarrow 0 \quad (k \rightarrow \infty) \text{ となる。同様にして}$$

$$v_1, v_2 \in E_+ \text{ が存在して、 } \tilde{p}\left(\pm\left((v_1 - v_2) - \sum_{n=1}^k b_n x_n\right)\right) \rightarrow 0 \quad (k \rightarrow \infty)$$

$$\text{となる。このより、 } z = (u_1 - u_2) + i(v_1 - v_2) \text{ とおけば}$$

$$\tilde{p}\left(\pm\left(z - \sum_{n=1}^k \alpha_n x_n\right)\right) \rightarrow 0 \quad (k \rightarrow \infty) \text{ となる。} //$$

(命題 11 の証明) $x \in E_+$, $|\lambda| > r_k(T)$ に対し、

$$\sum_{n=0}^{\infty} \tilde{p}\left(\frac{T^n}{|\lambda|^{n+1}} x\right) \leq \sum_{n=0}^{\infty} \frac{1}{|\lambda|^{n+1}} \tilde{p}(T^n) p(x) < \infty \quad \text{かつ 命題 10 及び}$$

$r_k(T)$ の定義から言える。 $T^n x \in E_+$ より補題から $y_x \in \tilde{E}$

$$\text{が存在して } \tilde{p}\left(\pm\left(y_x - \sum_{n=0}^k \frac{T^n}{\lambda^{n+1}} x\right)\right) \rightarrow 0 \quad (k \rightarrow \infty) \quad \dots (*)$$

となる。ここで $Sx = y_x$ とおけば、 S は E_+ から \tilde{E} への

写像で、 \tilde{E} 上の線形作用素に拡張できる。このとき (*) より

$\tilde{p}(S) \vee \tilde{p}(-S) < \infty$ となり, $(\lambda - T)S = S(\lambda - T) = I$ となるので, $\lambda \in \rho_R(T)$ かつ $S = R(\lambda, T)$ である。

又, (*) より $\lambda > 0$ かつ $x \in E_+$ なら $\forall x \in E_+$ となり $R_k(\lambda, T)E_+ \subset E_+$ である。 //

命題 12. $\lambda_0 \in \rho_R(T)$ かつ $R_k(\lambda, T) \geq 0$ とする。

このとき, $0 < |\lambda - \lambda_0| < \frac{1}{\tilde{p}(R_k(\lambda_0, T))}$ をみたす $\lambda \in \mathbb{C}$ について

$$\lambda \in \rho_R(T) \quad \text{かつ} \quad R_k(\lambda, T) = \lim_{k \rightarrow \infty} \sum_{n=0}^k (\lambda_0 - \lambda)^n R(\lambda_0, T)^{n+1}$$

が成り立つ。(右辺の収束は命題 11 と 同じ意味である)

(証明) $x \in E_+$ に対し, 命題 10 を用いて

$$\sum_{n=0}^{\infty} \tilde{p}(|\lambda_0 - \lambda|^n R_k(\lambda_0, T)^{n+1} x) \leq \sum_{n=0}^{\infty} |\lambda_0 - \lambda|^n \tilde{p}(R_k(\lambda_0, T))^{n+1} p(x)$$

が成り立つから, λ に対する級数より, これは収束する。従って補題より, ある $z_x \in \tilde{E}$ が存在して,

$$\tilde{p}\left(\pm \left(z_x - \sum_{n=0}^k (\lambda_0 - \lambda)^n R_k(\lambda_0, T)^{n+1} x\right)\right) \rightarrow 0 \quad (k \rightarrow \infty)$$

が成り立つ。 $T_\lambda x = z_x$ とおけば, T_λ は E_+ から \tilde{E} への写像で, \tilde{E} から \tilde{E} への線形作用素 \tilde{T}_λ に一意に拡張できる。又

$$\tilde{p}\left(\pm \sum_{n=0}^k (\lambda_0 - \lambda)^n R_k(\lambda_0, T)^{n+1} x\right) \leq \sum_{n=0}^k |\lambda_0 - \lambda|^n \tilde{p}(R_k(\lambda_0, T))^{n+1} p(x)$$

より, $\tilde{p}(\tilde{T}_\lambda) \vee \tilde{p}(-\tilde{T}_\lambda) < \infty$ となる。更に, 任意の $x \in E_+$ に対し, $T_\lambda(\lambda - T)x = (\lambda - T)T_\lambda x = x$ となるので, $\lambda \in \rho_R(T)$

かつ $R_k(\lambda, T) = \lim_{k \rightarrow \infty} \sum_{n=0}^k (\lambda_0 - \lambda)^n R_k(\lambda_0, T)^{n+1}$ となる. //

更に, 次の定理を得る.

定理 3 (E_+, p) は p -内, 単調増加完備な半ノルム錐とする. T を E_+ 上の正斉次加法的作用素とすると

$$r_k(T) \in \sigma_k(T)$$

である.

(証明) $r_0 = r_k(T) \in \rho_k(T)$ と仮定すると, $R_k(r_0, T)$ が $\mathcal{L}(\tilde{E})$ の中に存在する. 即ち, $\tilde{p}(R_k(r_0, T)) \vee \tilde{p}(-R_k(r_0, T)) = c < \infty$ である. このとき, $0 < r - r_0 < \frac{1}{2c}$ なる r に對し, $R_k(r, T) \geq 0$ であり, $x \in E_+$ とすると,

$$\begin{aligned} \tilde{p}(R_k(r, T)x) &\leq \tilde{p}(R_k(r, T)x - R_k(r_0, T)x) + \tilde{p}(R_k(r_0, T)x) \\ &= (r - r_0) \tilde{p}(-R_k(r_0, T)R_k(r, T)x) + \tilde{p}(R_k(r_0, T)x) \\ &\leq c(r - r_0) \tilde{p}(R_k(r, T)x) + c \cdot p(x) \\ &\leq \frac{1}{2} \tilde{p}(R_k(r, T)x) + c \cdot p(x) \end{aligned}$$

となり, したがって $\tilde{p}(R_k(r, T)x) \leq 2c \cdot p(x)$ となり,

$\tilde{p}((R_k(r_0, T) - R_k(r, T))x) \rightarrow 0 \quad (r \downarrow r_0)$ である. 従って,

$\tilde{p}(R_k(r_0, T)(-x)) \leq 2c(r - r_0)p(x)$ となり, $\tilde{p}(R_k(r_0, T)(-x)) = 0$ 即ち

$R_k(r_0, T) \geq 0$ となる.

$2 \geq 2^r$, $0 < r_0 - \mu < \frac{1}{c}$ に対し, 命題 12 より

$$\mu \in \rho_R(T) \quad \text{かつ} \quad R_R(\mu, T) = \lim_{R \rightarrow \infty} \sum_{n=0}^R (r_0 - \mu)^n R_R(r_0, T)^{n+1} \geq 0$$

となる. 又, 任意の $x \in E_+$ に対し, $y = R_R(\mu, T)x$ とおくと

$y \in E_+$ である. このとき, $\hat{p}(R_R(\mu, T)) = c$, とおくと,

$$\begin{aligned} (\mu - T)y &= x \quad \text{より} \quad y = \frac{1}{\mu}x + \frac{1}{\mu}Ty = \frac{1}{\mu}x + \frac{1}{\mu}T\left(\frac{1}{\mu}x + \frac{1}{\mu}Ty\right) = \\ &= \sum_{n=1}^R \frac{T^{n-1}}{\mu^n}x + \frac{T^R}{\mu^R}y \quad \text{となる.} \end{aligned}$$

各成分が E_+ の元より

$$\hat{p}\left(\frac{T^{n-1}}{\mu^n}x\right) \leq p(y) = p(R_R(\mu, T)x) \leq c \cdot p(x)$$

となり, $\hat{p}(T^{n-1}) \leq c \cdot \mu^n$ となる. 従って $r_R(T) \leq \mu$

となり矛盾である. よって $r_R(T) \in \sigma_R(T)$ である. //

これまで, 半ノルムによるスペクトルを論じたが,

ノルム空間上のスペクトルとの関係について調べる. T をノルム空間上の線形作用素とし, $r(T)$, $\sigma(T)$ をノルム空間上のスペクトル半径及びスペクトル [7; VIII, 2] とすると, 定義から

$$r_R(T) \leq r(T)$$

$$\sigma_R(T) \subset \sigma(T)$$

は明らかである. 一般にこれらは必ずしも一致しない.

以下にその例を示す.

例 2. $E = \{a = (a_n) \in l_1; \sum_{n=1}^{\infty} a_n = 0\}$ とおき,

E の元 a のノルムを $\|a\| = \sup_{n \geq 1} |a_n|$ によって定義する。
 $E_+ = \{a \in E; a_n \geq 0 \ (\forall n \geq 1)\}$ とおくと, E は順序ノルム空間で, E_+ は正規, 系正錐で $E = E_+ - E_+$ である。
 E 上の作用素 T を $a \in E$ に対し

$$(Ta)_n = \begin{cases} a_{2n} + a_{2n-2} & (n=2m, \ m \geq 1) \\ a_n & (n=2m+1, \ m \geq 0) \end{cases}$$

によって定義すると, T は E 上の連続線形作用素で, $TE_+ \subset E_+$ である。このとき, $r(T) = 2$ である。とて, $a \in E$ に対し, $p(a) = (\sup_{n \geq 2} a_n) \vee 0 \vee (-a_1)$ によって E 上の半ノルムを定義すると, $a \in E_+$ に対し $p(a) = \|a\|$ である。このとき $r_h(T) = 1$ であり, $r_h(T) < r(T)$ となる。又, $2 \in \sigma(T)$ であるが, $2 > r_h(T)$ より $2 \notin \sigma_h(T)$ で $\sigma_h(T) \subsetneq \sigma(T)$ である。

次に T が順序ノルム空間上の非有界な正作用素であっても, 半ノルムによれば有界な作用素になる場合の例を示す。

例 3. E は例 1 と同じ空間とし, $f \in E$ に対し

$$Tf(x) = \frac{d^2}{dx^2} f(x) + \frac{d^2}{dx^2} f(-x) - 2 \sum_{n=1}^{\infty} \frac{d^{2n}}{dx^{2n}} f(0)$$

とおくと, T は E から E の中への線形作用素であり, $TE_+ \subset E_+$ である. このとき, $\|T\| = \sup \{\|Tf\| : \|f\| \leq 1\} = \infty$ となり
 かつ $\lim_{n \rightarrow \infty} \|T^n\|^{1/n} = \infty$ となる. ところが, $f \in E_+$
 に対し, $p(f) = \|f\|$ によって E_+ 上に半ノルムを定義
 すると, $p(T) = 2$ かつ $p_n(T) = 2$ となる.

以上の例が示すように, 最初に入, ていたノルムと
 半ノルムによるスペクトルは必ずしも一致しない. しかし,
 半ノルムと一致するようにノルムを導入しなおすことはでき
 る. 半ノルムと作用素ノルムとの関係として, $S \in L(\hat{E})$
 に対し, $\|S\|_1 = \sup \{\|Sz\|_1 : \|z\|_1 \leq 1, z \in E\}$ と
 おくと, 次の命題が成り立つ.

命題 13. $S \in L(\hat{E})$ に対し,

$$\frac{1}{3} \|S\|_1 \leq \tilde{p}(S) \vee \tilde{p}(-S) \leq \|S\|_1$$

が成り立つ.

(証明) 任意の $z \in E$ に対し, $\|Sz\|_1 \leq \|S\|_1 \|z\|_1$ が
 成り立つ. $x \in E_+$ に対し, $p(x) = \|x\|_1$ より

$$\tilde{p}(Sx) \vee \tilde{p}(-Sx) = \|Sx\|_1 \leq \|S\|_1 p(x)$$

となり, $\tilde{p}(S) \vee \tilde{p}(-S) \leq \|S\|_1$ が成り立つ

次に $\hat{p}(S) \vee \hat{p}(-S) = c$ とおく。任意の $z \in E$ と任意の $\varepsilon > 0$ に対し, E_+ の元 a が存在して, $a \geq z$ かつ $p(a) \leq \hat{p}(z) + \varepsilon$ が成り立つ。このとき $a - z \in E_+$ かつ $p(a) + p(a - z) \leq 2p(a) + \hat{p}(-z) \leq 3\|z\|_1 + 2\varepsilon$ である。これより $\|Sz\|_1 \leq \|Sa\|_1 + \|S(a - z)\|_1 \leq c(p(a) + p(a - z)) \leq c(3\|z\|_1 + 2\varepsilon)$ となり, $\varepsilon > 0$ は任意より $\|S\|_1 \leq 3c$ を得る。 //

定理 1 から $(E, \|\cdot\|_1)$ はバナッハ空間である。上の命題 13 を使うと, T を $(E, \|\cdot\|_1)$ 上の作用素と (この $\nu(T)$, $\sigma(T)$) を考えると, $\nu_R(T)$, $\sigma_R(T)$ と等しくなることがわかる。従ってバナッハ空間上のスペクトル理論を使っても定理 3 の結果が得られる。更に次の結果も得られる。

命題 14. (E_+, p) と T は定理 3 と同じ条件を満たすとする。このとき $\rho_R(T)$ は閉集合である。

REFERENCES

- [1] W. Arendt, P. R. Chernoff and T. Kato, A generalization of dissipativity and positive semigroups, J. operator theory, 8 (1982), 167 - 180.
- [2] F. F. Bonsall, Linear operators in complete positive cones, Proc. London Math. Soc., 8 (1958), 53 - 75.
- [3] M. Krein and S. Grosberg, Sur la decomposition des fonctionnelles on composantes positives, C. R. (Doklady) Acad. Sci. URSS (N. S.) 25 (1939), 723 - 726.
- [4] D. W. Robinson and S. Yamamuro, The canonical half norm, dual half norms and monotonic norms, Tohoku Math. J., (to appear).
- [5] H. H. Schaefer, Topological vector spaces, Macmillan, New York, 1966.
- [6] S. Yamamuro, On linear operators on ordered Banach spaces, Bull. Austral. Math. Soc., 27 (1983), 285 - 305.
- [7] K. Yosida, Functional analysis, Springer-Verlag, 1974.